

## 現代ドイツ語の語彙と造語の特色\*

田 中 宏 幸

### ま え が き

ある社会の物質的・精神的所産である文化の変遷は、その言語表現にも反映されざるをえない。なかでも語彙体系は音韻や造語やシンタックスなどの部門に比較して、はるかに強くその影響を受けることは明白である。新しい事物や概念には、新しい言語表現が必要であり、他方で事物の消失などにより不要となった語が忘れられ廃れていく。従って、簡単にいえば語彙の特色は、どのような新語が加わり、どのような語彙部分が消失ないし廃れたかによって示されることになる。

ところで現代ドイツ語の語彙はどのような特色を示すのであろうか。つまりどのような新語が登場し、どのような語が廃語となったのであろうか。ここで現代の範囲を EGGERS (76f.)<sup>(1)</sup>に従って1870年以降とし、特に戦後の30年を中心として考えているが、この19世紀末からの最近数十年間のドイツ文化圏での変転はまことにめまぐるしいものであった。これを反映して、ドイツ語の語彙は著しい変貌をとげた。さらに、それは今日もなお、絶えず変動する現代の文化状況に応じて、日毎に変らざるをえない運命にある。このような状況は、今日世界的に共通して見られる所であろう。この著しい変貌と絶えざる変動を詳細に洩れなく汲みつくすことは、しかし不可能に近い。最近数十年に登場した新語だけでもおびただしい量にのぼる。それに各種の集団語などの複雑な部分体系の集合から成る、その全体を見渡すことは容易なことではない。ここではそのなかの平均的ないし共通的な一般の文章語 *Schriftsprache* に限定して、その語彙に見られるいくつかの顕著な傾向について報告するにとどめたい。

この一般語というのも必ずしも明確ではないが、大体 EGGERS (11)の《実用散文》*Gebrauchssprosa*, MÖLLER (12)の《実用語》*Gebrauchssprache*, GLINZ (443)の《標準語》*Standardsprache*, MOSER II (446)の《平均標準語》*Durchschnitts-Hochsprache*,あるいは《一般的標準語》*allgemeine H.* (同450)などに相当する。語彙に限っていえば POLENZ (137)の《共通語彙》*Gemeinwortschatz* ということになる。

\*本稿は1975年10月日本独文学会新潟学会で学会の依頼により企画した研究分科会《現代ドイツ語の特色》の一環として報告した原稿に加筆・補充したものである。

(1) 文献は文献表(104ページ)の著者名で引用。( )内のアラビア数字はページ数。

## 1 専門語の影響

《ドイツ語史》の著者 BACH (406) は、この最近五十年間のドイツ語における語の必要性は、過去の数世紀に比較して数倍に達するほど大きくなったと述べている。特にこの必要性は各種の専門語、とりわけ著しい進展をとげつつある分野で最も大きい。この必要性を満たすため多数の新しい言語表現が形成されることになった。つまり新語のほとんどは、多くはまずこのような各種専門分野で登場する。しかし、近來のドイツ語では、かなりの語が専門語内にとどまらずに一般語に流入する傾向が強くなった。これはひとつには現代人の積極的な知的関心も関与していると思われるが、何より新聞・雑誌・各種出版物や放送などのマス・メディアの発達による所が大きく、以前には考えられなかったような様ざまの専門用語が平均的ドイツ人の語彙にもたらされることになった。例えば Datenverarbeitung〈情報処理〉, Nachrichtensatellit〈通信衛星〉, Herzinfarkt〈心筋梗塞〉, Kreislaufstörung〈循環障害〉, Gesamthochschule〈総合大学〉, Umweltschutz〈環境保護〉, Mehrwertsteuer〈付加価値税〉などの用語は、いずれも比較的新しく一般語にもたらされたものであるが、今日、大ていの平均的一般人の知る所である。こうした各種の専門語は絶えず一般語にもたらされつつあり、どんな注意深い辞典編者でも、すべてを直ちにとらえることは困難である。このような状況は邦語でも認められるが、いわゆる文明語の今日の共通現象と想像される。ともかく各種専門語の影響ないし、その摂取は現代ドイツ語の一般語彙の大きな特色として多くの学者によって注目されている<sup>(2)</sup>。

この結果として、必然的に語彙量の増大が目立ってくる。MACKENSEN IIの《ドイツ語辞典》は1955年3版から7年後の1962年の4版で約2万語の新語を追加して16万語収録している。さらに5年後の5版で数千語増加しているもののようである。一方 DUDEN の《正書法辞典》は1958年の14版から15年間に約4万語追加、現在の1973年の17版では16万語収録するに至った。これによれば約4分の1がこの15年間に増加したことになる。もちろん、これはかなり大ざっぱな評価であって、収録語の選択についての規準や観点も関連することはいうまでもない。しかしその宣伝文によると DUDEN はまさに一般文章語の資料に基づき作業を進めているらしいので、その実状をかなりよく把握していると推定される<sup>(3)</sup>。なお、一部で廃れた語が除去されているから、全体的に見て相当多数の新語が一般語に流入したと見ていい。

(2) EGGERS 91ff., MACKENSEN I 246ff. さらに各所参照。MÖLLER 13ff., 45ff., MOSER I 172ff., II 446, 450ff. POLENZ 136ff.

(3) DUDEN 16版の表紙カヴァーの宣伝文に《編集部のコレクションは今日、新聞、雑誌、スポーツ文献、一般向専門文献、文学作品からの例証を記載した百万以上のカードを蔵している。言語カードを手がかりとしてドゥーデン編集部は語彙と文法の領域の変化を確認することができるし又現代ドイツ語の発達傾向を見出すことができる。カードは又どの語が新しく使用され始めたか、又それがどの分野から来たものかを……知らせてくれる》とありその作業方法がうかがわれる。

この傾向は又、当然一般人の所有語彙量の増加を促すことになる。MACKENSEN I (150f.) によると世紀末の平均的都市住民は約6～8千の語彙を所有していたが、現代では2万以上であるらしい。しかし、これは他方で理解はできるが活用できない、いわゆる受動的語彙の増加と、使用語彙の不安定性をひき起すこととなろう。

さて、具体的にどのような語が、どのような分野からもたらされたのであろうか。これについての最も詳細な記述は MOSER II (450ff.) に見られ、大体 1880 年から 1957 年頃までの状況を知ることができる。工業技術、交通、通信、映画・放送、経済、医療・保健スポーツ、政治、国際関係、学問・芸術などの分野から実におびただしい語が一般語に流入していることが分かる。最近のケースを含めていくらかの例を引用しよう。\*印を付した語は MOSER II にない例である。

まず工業技術の分野からは例えば Maschinenbau〈機械工学〉, Sortiermaschine〈選別機〉, maschinell〈機械的な〉, maschineschreiben〈タイプを打つ〉, Energiewirtschaft〈エネルギー産業〉, Kraftanlage〈発電所〉, Wärmeregler〈サーモスタット〉, Zentralheizung〈セントラル・ヒーティング〉, Nachtstrom〈夜間電気〉, Überschallgeschwindigkeit〈超音速〉, Staubsauger〈電気掃除機〉, Öltanker〈油送船〉, Dreistufenrakete〈三段ロケット〉, Atomkraftwerk〈原子力発電所〉, atomar〈原子の〉, Kernphysik〈核物理学〉, Elektronenmikroskop〈電子顕微鏡〉などに代表される Maschine, Kraft, Energie, Atom, Kernなどを成分とする多数の新語がもたらされた。さらに Polystyrol, Nylon, Perlonなどの新しい物質や繊維の名称, Kugelschreiber〈ボールペン〉, Diktaphon〈ディクタフォン〉, Rolltreppe〈エスカレーター〉, Automation〈オートメーション〉などが思い起されよう。最近の例としては宇宙科学技術関係の Mondrakete〈月ロケット〉, Raumschiff(\*), -station\*〈宇宙船, ～ステーション〉,それに Lärmwall\*〈防音堤〉, Linearbeschleuniger\*〈リニアモーター〉, Quarzuhr\*〈水晶(発振)時計〉そして Computer\* 関係の用語などが追加されよう。

交通の発達も目ざましいものがあったが、まず鉄道関係で Bahn〈鉄道〉, Zug〈列車〉, Wagen〈車輛〉が成分となった多数の合成語と鉄道関係用語が登場した。ごく最近の例としては例えば Autoreisezug\*〈自動車旅行列車〉(フェリー式に自動車を運送する列車), Intercity-Zug\*〈都市間特急列車〉があげられよう。一般的な Verkehr〈交通〉, Straße〈道路〉を含む形成、そして自動車関係の用語が同様に豊富である。Wochenendverkehr〈週末交通〉, Schnellstraße〈高速道路〉, Personenkraftwagen (PKW)〈乗用車〉, Sportwagen〈スポーツカー〉, Kombi(-wagen)〈ライト・ヴァン〉, (Auto)bus〈バス〉, Obus〈トロリーバス〉, Einachsanhänger〈二輪接続車〉, Moped〈バイク〉, Automarkt〈自動車市場〉, Gebrauchtwagen〈中古車〉, Wohnwagen〈キャンピングカー〉, Austauschmotor\*〈交換エンジン〉(古いエンジンの代りに新しいものに交換する場合にいう), Tankstelle〈ガソリンスタンド〉, tanken〈給油する〉, Parkuhr〈パーキングメーター〉, Fahrschule〈自動車学校〉, Vergaser〈気化器〉, Gang〈ギヤ〉, Nebelscheinwerfer〈フォッグランプ〉, lichthupen〈合図燈をつける〉(追越などの際に), Zebrastreifen〈横断歩道〉(文字通りには〈ゼブラ条線〉の意), Kriechspur\*〈低速車線〉(高速道などの大型車用の上り坂にある。kriechen〈這う〉から形成された比喩的表現)などはくモータリゼーション〉Motorisierungの時代を反映する一般の語である。航空の発達も Flug や Luft-を成分とする多数の合成語を生み出した。最近の例は Jumbo(-jet)\*, Airbus\*であるが、これはもちろん外来語である。

映画・放送分野からは Farbfilm〈カラー映画〉, verfilmen〈映画化する〉, synchronisieren〈シンクロナイズする〉, Ultrakurzwelle (UKW)〈超短波〉, Fernsehkamera〈テレビカメラ〉, Bildschirm〈ブラウン管のスクリーン〉, Farbfernsehen\*〈カラーテレビ〉, Tonbandgerät〈テープレコーダー〉, Kasset-

tenrecorder\*〈カセットレコーダー〉などを例としよう。

経済関係では Wirtschaft 〈経済〉, Arbeit, Industrie, Werk 〈作業, 工場〉, Betrieb 〈経営, 操業〉, Handel 〈通商〉, Preis 〈価格〉などが多数の合成語の成分となる。Wirtschaftswunder 〈経済(復興)の奇蹟〉は一時流行語でもあった。他に Arbeitsamt 〈労働局〉, -markt 〈一市場〉, Arbeitszeitverkürzung 〈労働時間短縮〉, Schwerarbeit 〈重労働〉, 新しくは Halbtagsarbeit\* 〈半日労働〉(つまり午前か午後の4時間の労働をさす), Wirtschaftsblock\* 〈経済ブロック〉, -spionage\* 〈産業スパイ〉などがある。

医療・スポーツでは Badekur 〈湯治, 入浴療法〉, Diätkur 〈食餌療法〉, Heilserum 〈治療血清〉, heilklimatisch 〈健康によい気候の〉, Psychotherapie 〈心理療法〉, Kreislaufstörungen, Managerkrankheit 〈マネージャー病〉; Aufschlag 〈サーヴィス(テニスなどで)〉, Mannschaft 〈チーム〉, Golfstock 〈ゴルフクラブ〉, Schischanze 〈ジャンツェ〉, Training 〈トレーニング〉, Olympiadorf\* 〈オリンピック村〉, 多数の Sport を成分とする語などが見られる。

政治の分野では戦後西ドイツで Bundes- 〈連邦〉の表現が当然多数登場した。その他 Recht 〈権利・法〉, Gesetz 〈法律〉, Amt 〈役所・局・庁〉, Steuer 〈税金〉, Finanz 〈財政〉, sozial 〈社会的〉などの概念が多数の複合語の成分となった。Bundesbahn 〈連邦鉄道〉, Arbeitsrecht 〈労働法〉, Soforthilfegesetz 〈緊急援助法〉, Gesundheitsamt 〈保健局〉, Steuererleichterung 〈税の減免〉, Sozialpolitik 〈社会政策〉,そして関連して Fünftageswoche 〈週五日制〉(つまり週休二日制)そして Freizeitgestaltung 〈余暇活用〉, Urlaubsgeld 〈休暇旅行手当〉などが新しい。

学問・芸術では例えば Schlüsselkind 〈かぎっ子〉, Jugendfürsorge 〈児童福祉〉, Spätentwickler 〈遅発達児〉など教育学の用語, Psychoanalyse 〈心理分析〉, Tiefenpsychologie 〈深層心理学〉, Minderwertigkeitskomplex 〈劣等コンプレックス〉, Neurose 〈ノイローゼ〉などの心理学の用語, それに Impressionismus 〈印象主義〉, neue Sachlichkeit 〈新即物主義〉, Zwölftonmusik 〈十二音音楽〉, Atonalität 〈無調性〉(音楽用語), Jazz といった文学や芸術の用語がある。哲学用語からは Existenzphilosophie 〈実存主義哲学〉と Grenzsituation 〈限界状況〉の二語をあげておこう。

この項の最後に DUDEN 17 版の序文で専門語から一般語に新しく取入れた語の例とされている数語を紹介しておく。これらは日本の辞書にはもちろん未だ収録されていない。Basisgruppe 〈基礎グループ〉は1967年頃政治関係で過激派学生の小グループを指すために登場したらしいが、今日では一般化して、各種の小グループを意味するもののようなのである。hinterfragen 〈背後関係を問う, (不問とされたことなどを) 問いなおす〉は同様政治分野からもたらされたと思われる。つぎの例は Trimm-dich-Pfad で文字通りには〈トリムしなさい〉を規定成分としているが、これは簡単な遊具など設備された数キロメートルの遊歩道をさす。健康で約合いのとれた身体を目標とするいわゆる Trimm-(-dich)-Aktion 〈トリム運動〉の産物である。スポーツと政治に関連する用語であろう。überfischen 〈乱漁する〉は多分に overfish なる英語の影響が感じられるが、政治・経済用語から入ったと思われる。つぎの例は先にもあげた Kriechspur (85ページ参照)である。交通用語である。同様 Nulltarif 〈無料乗車〉もこの分野と多分政治に関連している。公共交通機関の無料利用をさすものであろう。さらに Curriculum, Floating, Innovation の三外来語が示されている。Curriculum vitae 〈履歴書〉は以前から知られていたが、前者のみ単独に〈教育課程, カリキュラム〉の意味で用いるのは新しい。この語が一般に知ら

れるようになったのは最近のことである。Floating〈変動相場制〉はつい最近話題になった国際的経済用語である。最後の例〈改新〉は多分政治の分野で最初用いられたと思われるが、これはラテン系の語として一部で存在したものに英語の影響が加わったケースである。

## 2 英語の影響

専門語からの影響と並んで指摘される現代ドイツ語の特色は、外来語の豊富さないしその影響である。国際的交流がますます盛んとなって行く今日の状況から見れば、むしろこれは当然の成行きであろう。このような状況は現代では多数の文明語に共通しているであろうし、一部の語彙は国際的にも共通して用いられている。

ところでドイツ語は、これまでもしばしば強い外来語の影響を受けてきた。これに対して又よく反対運動とか国語浄化運動が繰り広げられ、時どきかなり積極的なドイツ語化などが行なわれた。このドイツ語化も広義には外国語の影響であるが、いずれにしても今日組織的なこのような反対ないし浄化運動とかドイツ語化運動は見られない。これは外来語の摂取にとって有利な状況といわなくてはならない。

この外来語についての特色は、今日大体、二つの傾向からとらえることができる。既に前項の例の中にも含まれていたが、そのひとつは英語、特にアメリカ英語の影響であり、いまひとつはギリシャ・ラテン系の語彙の増加である。後者は一般に専門語の影響の一環として現われる傾向にあるが、他方又英語の影響が関連していることも多い。

さてドイツ語に対する英語の影響であるが、その最古の例は1260年にさかのぼる Boot〈ボート〉といわれている<sup>(4)</sup>。その後、次第に影響が増えて行くが、全体として見れば18世紀以前の状況はさして大きな意味をもたないであろう。しかし19世紀以降は、政治・経済、工業技術、社交・流行、スポーツなどの分野でその影響力が強くなってくる<sup>(5)</sup>。特に第一次大戦後、急速な影響の波が押寄せる。これはしかし一時ナチス時代に退潮した。そして戦後の1945年以降、特に西ドイツでその政治・経済情勢の当然の成行きとして強い影響を受けることになった。この状況は例えばかつてのフランス系外来語などに代って用いられるようになった英語系外来語から推定することができる。数例を参照されたい。

(4) CARSTENSEN II 3によるとリュウベックの古文書にこの語が見えるという。ちなみにクルーゲの語源辞典《KLUGE: Etymologisches Wörterbuch der deutschen Sprache. Berlin 1960<sup>18</sup>》ではこの例証の記載はない。

(5) 英語の影響に関しては古くは SEILER, Friedrich: Die Entwicklung der deutschen Kultur im Spiegel des deutschen Lehnworts, 4. Teil, 2. Abschnitt, Halle/1925<sup>2</sup>; PALMER, Ph. M.: The Influence of English on the German Vocabulary to 1700 (I), to 1800 (II), Berkeley and Los Angeles 1950/1960; GANZ, P.: Der Einfluß des Englischen auf den deutschen Wortschatz 1640–1815, Berlin 1957 など、又新しくは CARSTENSEN I,II, 概観は MOSER II 485ff., POLENZ 139ff. などを参照されたい。

Impresario/Manager, Billet/Ticket, Tendenz/Trend, Ensemble/Team, Hausse/Boom, Mannequin/Modell, Revue/Show, Chef/Boss

全体的に見てかってあれほど優勢であったフランス語も今日新しい影響をほとんど及ぼさなくなっていて、服飾流行の分野でも新しい外来語は多く英語系である<sup>(6)</sup>。この戦後の英語の影響についての最も詳細な報告は CARSTENSEN I に見られる。

この影響が及んだ主なる分野は政治、経済、工業技術、服飾・美容・食品、芸術・音楽、スポーツ、教育、学術などである。特に英語文化圏と密接な関係にある領域でこの影響が大きく、借用や引用が豊富である。一般人にもたらされる商業広告もひとつの目立つケースである。以下に主なる例を示そう。

政治に関しては Koexistenz〈共存〉, Lobbyist〈ロビイスト〉, Statement, 経済関係では Charter, Discount, Marketing, Public Relations, 工業技術では Air-Conditioning, Hovercraft (Luftkissenboot), 服飾・美容などでは Blue Jeans, Look, Pullover; Lotion, Make-up, Spray; Barbecue, Chewing-gum, Drink, Hot dog, 芸術や音楽では Pop-art, Musical, Song, スポーツでは Bowling, Swimmingpool, 学術からは Assistenzprofessor, Kybernetik, Stress, Sprachlabor〈語学実習室〉などが直接、間接(つまり翻訳借用などによって)に借用された。さらにつぎのような語が見られる。Bar, Beatle〈ビートル族〉, Bungalow, Cockpit, Come-back, Computer, Countdown, Design, Eskalation, Fan, Finish, Gag, Girl, Hit, Hobby, Image, Jet, Job, Paperback, Party, Poster, Pub, Publicity, Quiz, Report, Set, Sex, Slogan, Smog, Star, Story, Style, Test, Trainer usw.

このような英語の影響はしかし東ドイツでもかなり強いものらしく、既に MOSER III(10f.) は公式的反対にもかかわらず、一般にはかなりの英語系の語が借用されていて1957年以後の東ドイツ版 DUDEN にも収録されているとしている。又 CARSTENSEN II (2) によれば Broiler, Container, Dumper, Referee, Take のような CARSTENSEN I に入っていないような語も用いられているという。このうち Broiler, Container の2語は、その後西ドイツでも一般語に入った。今日の DUDEN はこれを収録している。

しかしこのような強力な影響の波も EGGERS (102) の見る所では、既に退潮のきざしを見せているという。ほかでも多数のこのような借用は無くてもいいとか、単なる一時的な借用であろうといった推定がなされている<sup>(7)</sup>。かつてのフランス語の影響とその退潮が先例として思い出される。にもかかわらず、例えば以下に見るような多数の翻訳借用やこれに準じた形成、意味借用といったケースを考慮するならやはり英語の影響は相当強く思われるし、かなりの足跡をドイツ語の語彙に残すのではないかと想像される。なお先述の例にもいくらかこの種の借用が含まれている。

(6) 拙論《現代ドイツ語の服飾用語における英語系外来語について》(金沢大学教養部論集・人文科学篇 7 所収) 参照。

(7) MOSER II(487) はこれらの借用の多数は全くななくてもいいとしている。又 WATERMAN (178) は多数の借用は Gastwörter として又忘れ去られるだろうといっている。

Datenverarbeitung (data processing), Geburtskontrolle (birth controle), Froschmann (frogman), weiche Landung (soft landing), Assistenzprofessor (assistant professor), Geschirrspüler (dish washer), Parkhaus (parking house), Gipfelkonferenz (summit conference), grünes Licht geben (to give the green light), eine Idee verkaufen (to sell an idea), er hat eine Speech gemacht 〈彼はスピーチをした〉などである。さらに Beinahe-Unfall 〈起りそうになった事故〉はnear- の影響であるし, preisbewußt は-conscious によるという。意味借用の例では本来〈気候〉を意味した Klima が Betriebsklima 〈作業環境〉のように用いられ、Kassette 〈小箱, 本のケース〉に対しいわゆるカセット(テープなど)を借用した。他に Satellit 〈衛星国〉, attraktiv 〈チャーミングな〉, kontrollieren 〈制御する〉など。又 bügelfrei (no iron), oben ohne (topless) などは英語の表現を自由に言いかえたものである。さらにドイツ製英語も登場するのは我国の場合と類似していて興味深い。Showmaster, Twen などがある。後者は Twenty と Teen 〈Teenager〉から創り出されたい。

最後にごく新しい借用とされる数例を CARSTENSEN II から引用しよう。Aerospace-Medicine 〈宇宙大気圏医学〉, Afterimage 〈残像, 幻影〉, Body Pop, Build-upper usw. 最後の2語の意味は不詳。Build-upper は多分 build up つまり aufbauen 〈(名声などを)築く, 有名にする〉と関係があるだろう。恐らくこれらは未だごく一部で用いられている例であろう。一般にもたらされるかどうか分からないが、この傾向のアクチュアルな一面を示すものとして注目されよう。

### 3 ギリシャ・ラテン語系の語彙

EGGERS (103) の意見では、英語からの借用よりはるかに大きい影響を及ぼしているのがこの系統の外来語である。これは主として学術的専門語からもたらされるもので、元来この分野では新しい語が必要になると、ギリシャ・ラテン語の素材を選択する伝統がある。それにはこれらの語が学問で占めてきた役割とか、表現の正確さ、造語の便利さ、それに国際性とかが基礎となっているであろう。従って単なる借用とは異なり、原語の則規による場合を含めて各種の造語も行なわれる。こうして形成された各種の表現が先述の専門語の一般語への流入の流れによって影響を及ぼすわけである。従ってこのような例は既にかなり含まれていた。MACKENSEN I (246) が今日のドイツ語彙の状況に関して《外来語化》*Verfremdwortung* と《学術化》*Verwissenschaftlichung* と称しているのは特にこの系統の語彙にふさわしい。

この特色ないし傾向に関して MÖLLER (25f.) は、これらの言語——つまりギリシャ・ラテン語——は今日ますます学ばれなくなっているのに、文学作品の影響が減少するのとは逆に、これらの語の単語や語幹、音節の使用が増加していると皮肉的な見解を示している。そして一般に anti-, neo-, mikro-, auto-, ko-, kontra-, -al, -iv, -os, -ion, -ität といった素材がいかに巧みに用いられているかは驚くべきものと述べている。

EGGERS (103ff.) は Konsum, Investition, Industrie, Infrastruktur 〈下部構造〉, Produk-

tivität, Opposition, konjunkturrell〈景気の〉, Stabilität, Inflation, supranational〈超国家的〉, Integration〈統合〉, Tourismus, Tendenz, Elementなどを新聞から拾い上げているが、同じような例を増加することは極めて容易であって、この系統の語彙の豊かさと一般語での頻度が想像される。Koalition〈連合〉, Kontrolle, Kontakt, kontrollieren, kriminell〈刑事(上)の〉, Mandant〈委任者〉, absolute Priorität〈絶対的優先〉, Justizorgan〈司法機関〉, Spekulation, Qualität, Konsequenz, Situation, orientieren, prokommunistisch, revisionistisch〈修正主義の〉, reagieren〈反応する〉, Dissident〈離反者〉, Imperialismus, Reformなどは《ヴェルト紙》Die Weltの第一面からすばやく集めてきた例にすぎない<sup>(8)</sup>。

しかしこれらの語も今日しばしばアメリカ英語を経由するために、語形だけからその由来を推定することはできない。先に引用したEGGERSの例のうちInfrastruktur, supranational, Integrationなどはそのケースらしい。前項であげたKoexistenz, Kybernetik, Eskalation, 又1でふれたCurriculum, Innovationもアメリカ英語の経由とされよう。又意味借用とされるattraktiv, kontrollieren, Kassetteもこの系列に加わるであろう。又先に示したanti-, ko-などもCARSTENSEN I (49ff.)によればアメリカ英語の影響が大きい。同趣のものに更にinter-, multi-, sub-, super-, ultra-そしてmini-〈miniature〉などがあげられる。なお英語の語彙の相当部分が古典語系素材であることも、これに関して思い起されなくてはならない。

しかし他方ドイツ語の語彙にも、古来この系統の語がかなりあり、少なくとも音相上は相互に共通した語も少なくない。従ってその相互の影響はかなり複雑な状況となろう。この共通の語のなかには、今日の国際交流上欠くことのできない多数のいわゆる《国際共通語》が含まれている。HELLER (38ff.)はこの種の語として大体600語を数えているがその大半はこの系統の語である。例えばつぎのような語である。

Adresse, Akademie, Atom, Atmosphäre, Ballet, Bombe, Bus, Charakter, Chronik, Datum, Defekt, Demokrat, Demonstration, Dialekt, Diplomat, direkt, Diskussion, Drama, Effekt, Examen, Export, extra, Fabrik, Figur, Firma, Format, Fotografie, Funktion, Garantie, Horizont, Hotel, Ideal, Import, Instrument, intelligent, Interesse, Justiz, Kalender, Kanal, Klima, Klinik, Kommission, Konferenz, Konsul, Kontrast, Kultur, Maschine, Material, Mechanismus, Methode, Minister, modern, Monument, Motiv, naiv, Natur, Norm, Ökonomie, Operation, Optik, Organ, original, Panorama, Paragraph, passiv, Periode, Pessimismus, Philosoph, Politik, populär, Position, positiv, praktisch, Präsident, primitiv, Prinzip, Problem, Profil, Programm, Proportion, Protest, Prozeß, Publikum, Quartier, Radio, Reaktion, realisieren, Reform, Rekord, Republik, Reserve, Revolution, Rhythmus, Romantiker, Sektor, Senat, separat, Serie, Situation, sozial, Spezialität, Stadion, subjektiv, Substanz, symbolisch, Sympathie, System, Technik, Telegramm, Theater, Theorie, These, Tradition, typisch, Universität, Variation, Votum, zentral, Zirkus, zivil,

(8) 1975年5月2日付(Nr. 108)による。



Zone など邦語でも知られている語が多い。

ごく新しいこの系統の語を紹介すると Analysand <(精神分析の)被分析者>, Gerontologie <老人医学>, Informatik <情報理論>, manipulieren <操作する>, manipulativ, Molekularbiologie <分子生物学> (DUDEN 17 版に収録されている), Nuklearmedizin <核医学>, Programmatik <意企>, Programmierung <プログラミング>, Quadrophonie <4 チャンネルステレオ>, repressiv <抑圧的> などがある。

このような外来語は一般に高級なイメージを伴う語として今日非常に好まれているが、これについては 6 で語選択と関連して再びふれることにする。

#### 4 方言・日常口語からの影響と古語の利用

特別なケースとして数は多くはないが、方言や日常口語の語が一般語に取入れられることがある。これはやはり現代の盛んな各地の相互交流やマス・メディアの発達と関係があるろう。又日常口語の利用は口語と文語の接近と関連しているが、これも放送などの影響を無視するわけにはいくまい。

こうして MOSER II (484) によるとバイエルン地方の Mädel <少女>, Dirndl <娘さん>——これは又 Dirndlkleid (つまり民俗衣装の名)の意でも用いるが——, Klampfe <ギター>, Knödel <肉だんご> とかミュンヘンの Kitsch <インチキ物>, シュヴァーベンの Spätzle <シュペツレ> (めん類の一種), 北ドイツの Bö <突風>, Diele <玄関の間> などが一般語彙に取入れられた。最近 DUDEN は aufmüpfig <反抗的な> という語を取入れているが、この傾向のものであろう。何かのきっかけでこうした語は今後も共通語彙に加わって行くであろう。

日常口語からの例とされるのは MOSER II (484) によると Knirps <折たたみ傘>, Papierkrieg <書類戦争> (役所などの書類過多をなかば皮肉って), Winker <方向指示器>, ausgeschlossen <不可能な> (元来 <締めだされた> の意であろう), ausgerechnet <よりもよって>, tadellos <非の打ち所のない>, tippen <タイプを打つ> (ポツポツたたくことを意味した), hochgehen <上る> (hinaufgehen の代り), furchtbar <ものすごい> (元来 <恐しい>) であるが俗語で <大へん> の意で用いられるようになったのが文章語でも入って来たということであろう。類似例に schrecklich, grausam など, phantastisch <すばらしい> などである。

さらに DUDEN 17 版からの例を補うと、まず序文にも引用されている kungeln <内密に取引する>, Remmidemmi <大騒ぎ> がある。他に abkapiteln <ののしる> (普通なら schelten), abklappern <さがし回る>, hinterbringen <後へもって行く> (通常は nach hinten bringen), hochklettern, hochkommen (いずれも hinauf <上へ> の意味で hoch が用い

られている), *nachmachen* (つまり *nachahmen* 〈まねる〉の俗語) などがある。*Macher* 〈とんでもないやつ〉, *Knast* 〈ぶた箱〉なども収められているが、後者はイディシュ(ユダヤ人が用いる特殊なドイツ語)に由来する低俗な語である。この傾向のひとつの例としよう。

古語が復活することも時に見られる現象である。ドイツ語の近來の例では、音楽関係の *Gambe* 〈ヴィオラ・ダ・ガンバ〉(チェロの前身), *Cembalo*, スポーツの *Turnier* (中世では騎士の馬上試合の意であったが、現代スポーツでの試合を指すために用いられることになった), 青少年運動では *Hort* (託児所), *Fähnlein* 〈組〉, 軍用語では *Tarnung*, *tarnen* 〈カムフラージュする〉(これは中世の叙事詩《ニーベルンゲンの歌》などに *tarnkappe* 〈かくれみの〉として見える中世語の復活である), *spähen* 〈偵察する〉などがある。さらに, *Verkehrssampel* 〈交通信号燈〉, *Zeitspanne* 〈期間〉, *Atommeiler* 〈原子炉〉, *Musiktruhe* 〈ステレオケース〉, *Tiefkühltruhe* 〈冷凍食品ケース〉, *Schnellimbiss* 〈簡易食事〉などに含まれる基礎成分はそれぞれ〈つりランプ〉, 〈指尺〉(長さの単位), 〈炭焼きがま〉, 〈長持〉, 〈簡易食〉(主として午前の間食をさし19世紀中葉には廃れていた)などを意味する古語であった。このような現象は数的には少ないが興味深い語彙の変化のひとつである。

### 5 廃 れ る 語

以上の四章はすべて新語に当てられたのであるが、他方で消失したか或いは廃れつつある語がある。それがどのような語かについてここで概観したい。

まず実際に用いられなくなった事物の名称は次第に廃れて行く。例えば *Gaslampe* 〈ガス燈〉, *Laternenanzünder* 〈ガス燈点火夫〉, *Docht* 〈燈心〉, *Kutsche* 〈馬車〉, *Pferdebahn* 〈鉄道馬車〉というような語は、歴史的な関心ででもない限り次第に用いられなくなるであろう。古い貨幣単位、度量衡単位も廃れる運命にある。*Taler*, *Groschen*, *Klafter*, *Zoll* などである。しかしこれらの語も比喩的に或いは慣用句の中で生きのびる可能性をもっている。*FRIEDERICH* (477) は *der Groschen ist gefallen* 〈とうとう分かった〉など11の慣用句を収めているし、この語は俗語では10ペニヒ貨幣のことも指している。

廃語の体系的なケースは戦時中の用語や、ナチス時代の語彙であろう。*MOSER II* (495f.) は *Lebensmittel-* 〈食料品〉, *Rauch-* 〈煙草〉-*karte* 〈券〉, *Dienstverpflichtung* 〈奉仕義務〉, *Urlaubsschein* 〈休暇証〉, ナチス時代の用語例として *Drittes Reich* 〈第三帝国〉, *Gleichschaltung* 〈統合〉, *Mädelschaft* (*Schaft*) 〈少女団〉(15人を単位としたらしい), *Kinderlandverschickung* 〈児童疎開〉, *Arisierung* 〈アリアン化〉(つまりユダヤ系財産のアリアン系への移転を意味する)などの例をあげている。ナチスの語彙についての概観は今日 *BERNING* でえられる。*Abstammungsnachweis* 〈血統証明〉, *Ahnenpaß* 〈血統証明手帳〉, *Arbeitsmaid* 〈少女労働奉仕員〉から *Volkskanzler* 〈国民宰相〉, *Volkswagen*, *Zuchtwart* 〈優生学者〉に至る語彙が収録され、出典や意味などが説明されている。このよ

うな語彙は歴史的な関心がなければ無用のものである。なお、手軽なリストは WASSERZIEHER (43f.) に見られる。Volkswagen が残っているのは興味深い。VW と略されることが多いのは何かその由来と関係があるかもしれない。

同様に戦争直後の状況で今日も早見られないような entnazifizieren 〈ナチス解体する〉, Entlastung 〈追放解除〉, Mitläufer 〈同調者〉, Kontrollrat 〈占領管理機関〉, trizonal 〈三国管理ゾーンの〉などの MOSER II (497) が示す例は廃れざるをえないであろう。同様の例は WASSERZIEHER (44f.) にも見られる。我国の戦中・戦後の多数の語や表現の運命と全く同じであろう。

一般にアクチュアルな時流に速やかに応じて生まれた語、移り变りの激しい実体——たとえば服飾流行のように——を映す語彙は又廃れるのも速いのが普通である。ごく最近の例では Mini は既にその頻度が著しく低下している。この語もしかし接頭統的な成分としては生き残る可能性が充分ある。

## 6 語選択の傾向

以上のような一般語の語彙の状況から、語選択の傾向もある程度まで推測できる。まず外来語を含めて、体裁のいい高級なイメージを与える専門用語を好んで用いる傾向が指摘される。これらの語は、他人に対して教養と学識を誇るのにまことに好都合なわけで、EGGERS (108) は例えば Größenordnung 〈大きさ〉, Zuwachsrates 〈増加率〉, langfristig 〈長期の〉というような語が様ざまの——しばしば不似合な——文脈で用いられ、一種の流行語となっているといっている。確かに、いわゆる流行語と称される語彙にこのような傾向が読みとられる。MÖLLER (33) の収集した流行語例に Schwerpunkt 〈重心, 重点〉, Ebene 〈水準, レベル〉 (例えば Landesebene 〈州レベル〉, Republikebene 〈共和国レベル〉), im Rahmen…… 〈の枠内で〉, orientieren auf 〈方向づける〉, darsellen 〈示す〉 (sein 〈～である〉の意味で例えば Die vier Lehrlinge stellen ein gutes Kollektiv dar. 〈(その) 四人の見習生はよい集団である〉のように好まれるという), Voraussetzung für…… 〈のための前提〉, Kategorie 〈カテゴリー〉, Kapazität 〈キャパシティ〉, Aspekt 〈様相〉, Problem 〈問題〉, Dimension 〈次元〉, Klima 〈気候, 雰囲気〉, Proportion 〈プロポーション〉, formal 〈形式上の〉, positiv/negativ, qualitativ 〈質的な〉などが見られる。又 MOSER II (490ff.) にも 1880 年以後の流行語について、かなり詳細なリストを示しているが、この傾向の多数の語が含まれている。WASSERZIEHER (69f., 81), WUSTMANN (296ff.) などの流行語のリストからもこの系統の語を見つけることは容易である。もちろん流行語にはこれ以外のケースもあるし、他方流行語でないこの系統の専門語を用いる傾向が強いことはいうまでもない。

例えば先述の古典語系の外来語の愛用もこの傾向を代表している。最近の《シュピーゲ

ル誌》Der Spiegel の短い 26 読者の投書からつぎのような語を見出すことができた<sup>(9)</sup>。一般の語選択のこの傾向を示す例となろう。

(re) sozialisieren <(再) 社会化する>(つまり社会復帰させる意), exemplarisch <典型的>, degradieren <左遷する>, konsequent <首尾一貫した>, potentiell <可能な>, Antithese, anarcho-chaotisch <無政府的無秩序の>, Naivität <素朴さ>, personifizieren <人格化する>, Alternative <二者択一>, Realität, akut <緊急の>, Reverenz <敬意>, frustrieren <ざ折させる>, Humanität, Konsequenz, paritätisch <同権の>, exponiert <危険にさらされた>, Konfliktsituation <紛糾状況>, transparent <透明な>

《我われの実用語の親は学術である》という MÖLLER (109) の主張は文構造や造語の傾向をも含めているが、この語選択の傾向にもあてはまる。なお前述の MACKENSEN の《学術化》(89ページ) が思い起されよう。

この高級な専門語を選択する傾向は、元来いわば注意深い配慮からでてきたものであろうが、既に流行語に見られるように安易に流行を追うといった傾向も見られ、これはどちらかといえしばしば不注意な状況で語選択を行なっている現われと受取られる。EGGERS (108ff.) は語選択の粗略な傾向として、流行語などをその由来も充分確かめないで不似合な文脈などで用いるケースと、流行語ではないが日常口語レベルの語などをうっかり文章語に持込んでしまう場合を指摘している。前者としては例えば rangeln <つかみ合う> という方言に由来する動詞から造成された Gerangel <つかみ合い> という語を das Gerangel der Ministeranwärter <大臣候補者のつかみ合い> などと新聞で所かまわず用いているケースなどをあげている。又元来自動車について用いられた <追加料金> の意味の Extra を <追加手当> などに転用する例がつけ加えられる。もうひとつの例の stattfinden <行なわれる> の不向きな文脈での使用は先述の darstellen などと同列のものであろう。

日常口語からの不用意な語選択の例として槍玉にあげられているのは例えば sich vor-beinehmen <失敬なことをする> などの全く客観的な文章語での使用や, kaputt <ぶっこわれた> という俗語的形容詞の systematisch kaputt gemacht <体系的にぶっこわした> という文章語での用例である。EGGERS によればこれは語選択上の不注意ないしずさんさに他ならないのである。

一方で高級なイメージの専門語——それは注意深い選択としてであれ、単に流行に従った場合も含めて——が登場し、他方で文章語に不似合な流行語や、個人的な口語的語彙が現われるといった傾向は、しばしば奇妙なコントラストをひき起す。例えば文体にとって不似合ということに加えて systematisch と kaputt はまことに不釣合ということになる。先述の読者投書の例はこの点で必ずしも最適のテキスト類ではないが——最も俗語的な表現が現われやすいテキストに属するから——このコントラストは明白に現われている。

(9) 1975 年 3 月 10 日号 (Nr. 11) 7~12 ページ掲載。

る。例えば同一の投書テキスト内に、先述の高級な語と *frotzeln*〈からかう〉とか *Knast*〈ぶた箱〉が同居している。このような奇妙なコントラストは広告語でも見られるらしい (RÖMER, 114)。

このような性急な、役立ちそうなものは何でも手当たり次第に利用するという傾向は、確かに現代人の、とりわけ大都会人のテンポの早い生活環境と関連づけられるかもしれない。しかし他方、文章語と日常口語の接近とか、文体を活気づけたいという気持なども加わるかもしれない。いわゆる名詞文体が示す無味乾燥さに音声言語でいえばイントネーション的感情に当るものが加わっている場合も感じられる。

## 7 生産的な造語タイプ<sup>(10)</sup>

これまで示してきた多数の新語例からは《合成(形成)》*Zusammensetzung* と語群からの派生——《共成》*Zusammenbildung* と称される——が生産的なタイプとして注目されよう。新語では特に名詞が頻繁なので、新語のほとんどが合成あるいは共成名詞という印象を受けることになる。今日なるほど先述のように直接的な外来語の借用も広く認められるが、全体として見れば、やはりこの合成形成を中心とした既存の言語素材による造語が好まれている。翻訳借用などの間接的借用や古典語系の外来語ではこの造語手段が大きな役割を演じていることは言うまでもない。

今日、特に好んで用いられる生産的な造語タイプは、まず名詞では先述のように合成である。なかでも三成分以上の多項ないし規模の大きい合成名詞が増加している。ついで語群からの派生語、そして《接合語》*Klebewörter* (MOSER II, 475) と称される形容詞、過去分詞、副詞、数詞それに動詞幹などを規定成分とする形成が非常に多いと指摘されている。

多項合成語例 : *Betonmischmaschine* 〈コンクリート・ミキサー〉, *Stromlinienform* 〈流線型〉, *Hochschulreform* 〈大学改革〉, *Fünftagewoche* 〈週五日制〉, *Überschallflugzeug* 〈超音速機〉, *Luftkissenschwebefahrzeug* 〈ホヴァークラフト〉, *Unterwasserfernsehkamera* 〈水中テレビカメラ〉

語群からの派生語 : *Stellungnahme* 〈態度表明〉, *Kontaktaufnahme* 〈接触交渉〉, *Lärm-macher* 〈騒がしい人〉, *Spätentwickler* 〈遅発達児〉, *Tonabnehmer* 〈ピックアップ〉, *Wärmeaustauscher* 〈熱交換器〉, *Programmgestaltung* 〈プログラム構成〉

接合合成 : *Großhändler* 〈大商人〉, *Großunternehmer* 〈大企業〉, *Kleinkraftwagen* 〈小型車〉, *Höchstleistung* 〈最高能率〉, *Gebrauchtwagen* 〈中古車〉, *Einbahn* 〈一方通行路〉, *Zweitausfertigung* 〈写し〉, *Reißverschluss* 〈ファスナー〉, *Wohnraum* 〈住居〉, *Fahrbahn* 〈車線〉など。この規定成分として好まれるのは *groß*, *klein*, *fern* 〈遠い〉, *schnell* 〈早い〉, *sofort* 〈直ちに〉, *selbst* 〈*engl.* self〉, *nicht* 〈*engl.* not〉, *voll* 〈*engl.* full〉などの形容詞や副詞である。

(10) これについては FLEISCHER, MOSER II 474ff., NAUMANN それに拙論《現代ドイツ語の造語における特色》(金沢大学教養部論集・人文科学篇 5 所収) 参照。

名詞の《派生(形成)》*Ableitung* では-er (-ler, -ner のヴァリエントがあるが)と抽象名詞を形成する-ung, -heit/-keit, 同じく外来語系の-ität, -ismus などが生産的とされる。FLEISCHER (127) は-er は特に生産的としているが、まず動詞幹を基礎とした行為者(Anlieger〈沿道住人〉)や器具類(Kühler〈クーラー〉, Umformer〈変換機〉, Fernseher〈テレビ(受像器)〉)を示す名詞が多い。さらに既にのべた共成の成分としても非常に生産的である。-ler, -ner は元来-er から発生した接辞であるが、主として名詞を基礎として人を指す名詞を形成する。-ner はそれほど用いられない。-ung も-er と並ぶ生産的接辞で(FLEISCHER, 151) 動詞幹を基礎成分として Umwertung 〈価値変換〉, Elektrifizierung〈電化〉など多数の名詞を形成している。一部には先述の共成が含まれる。-heit は主に形容詞と過去分詞を基礎として抽象名詞を形成するが、一部は具体的な事物に転用もされる。これから発生した-keit は-ig, -lich, -sam, -bar に終る形容詞などを基礎とする。-sam 以外の接辞は現今非常に生産的なので、これらからの-keit 形成も豊富である。

接頭辞では fragen 〈問う〉からの Gefrage 〈うるさい質問攻め〉のタイプを形成するge-がなお生産的として注目される。ただし幾分ネガティブなニュアンスをもつ形成である。6で触れた Gerangel はこのタイプの派生である。

Unfälle〈被災者, 被害者〉, Fußballer〈フットボール選手〉, Kipper〈ダンブカー〉, Schnellhefter〈高速製本機〉, Gewerkschaftler〈労働組合員〉, Sportler〈スポーツマン〉; Lautung〈調音〉, Aufwertung〈平価切上げ〉, Motorisierung (Verkraftung)〈モータリゼーション〉, Differenziertheit〈多様性〉, Informiertheit〈情報承知, 博識〉, Bearbeitbarkeit〈処理可能性〉, Preiswürdigkeit〈値ごろ〉, Kapazität, Nervosität〈神経質〉, Realität, Sexualität〈セクシャリティ〉, Neonazismus〈ネオナチズム〉, Strukturalismus〈構造主義〉, Impressionismus〈印象主義〉, Tourismus〈ツーリズム〉

それに各種の短縮語が注目される。これにはまず Hallen(schwimm) bad〈屋内プール〉とか (Atom) kernforscher のような多成分合成語の一成分を省略するタイプがある。ついで UKW〈超短波〉, PKW〈乗用車〉, Asta〈一般学生委員会〉のようなイニシャルや音節を組合わせた短縮語が豊富である。これ以外に Kombi(wagen)〈ライト・ヴァン〉, (Auto)-bus〈バス〉, Pulli〈Pullover〈プルオーバー〉〉のような前後の省略, S-Bahn〈急行(電車)線〉のようなタイプが加わる。

形容詞でも合成形成が多いが、特に名詞を規定成分とした formschön〈形の美しい〉, klangrein〈響きの純粋な〉, himmelblau〈スカイ・ブルーの〉というタイプが好まれる<sup>(11)</sup>。これと並んで hautschonend〈肌を保護する〉のような分詞形容詞も多く、これは形成の手順からいえば共成的な面をもっている。つまり Haut schonen〈肌をいたわる〉という表現から形成されたものと解される。英語の影響の項でふれた-bewußt もこのタイプ

(11) FLEISCHER 217ff. 色彩形容詞については MÖLLER 19f., 拙論『ドイツ語の最近の色彩語について』(ドイツ文学 44 号所収) 参照。

に入る。

形容詞を形成する接辞では *-bar*, *-ig*, *-isch*, *-lich*, それに対立概念を形成する *un-* が好まれている。なかでも *-bar* は《殊のほか生産的》(FLEISCHER, 229) で動詞幹から受動の可能性 (*definierbar* <定義されうる>) を示す多数の形容詞を形成する。*-ig* も《現代ドイツ語の最も生産的な形容詞接尾辞に属し》(FLEISCHER, 236) 主として名詞及び名詞語群を基礎成分とした形成が好まれる (*kitschig* <いかさまの>, *katzenaugig* <猫の目の>, *vierzylinderig* <4 シリンダーの>)。語群のケースは一種の共成である。これと副詞の形容詞化 (*sofortig* <即座の>) にも好んで用いられている。*-isch* は特に外来語と固有名詞の形容詞形成に好まれている。*proletarisch* <プロレタリアの>, *soziologisch* <社会的>, *nigerianisch* <ナイジェリアの> など。*-lich* も又これらとともに現代語の最も生産的な接辞に属する (FLEISCHER, 244)。名詞や名詞語群が基礎となって *arbeitsgerichtlich* <労働裁判所の>, *altsprachlich* <古代語の>, *zwischenmenschlich* <人間間の> などのタイプの形容詞を形成するが、さらに動詞幹や形容詞を基礎とした *befremdlich* <変な>, *schwärzlich* <黒味があった> など希ではない。

*regendicht* <防水の>, *idiotensicher* <ばかでも取扱える>, *preisgünstig* <値ごろな>, *buttergelb* <バターのような黄色の>, *veilchenblau* <すみれのように青い>, *kinderfreundlich* <子供に親切な>, *vielversprechend* <有望な>, *programmgesteuert* <プログラム制御された>, *zentralbeheizt* <セントラルヒーティングの>, *gefühlig* <スキーに好適な>, *humorig* <好きげんの>, *umschichtig* <交代制の>, *filmisch* <映画の>, *israelisch* <イスラエルの>, *automatisch* <自動的な>, *quadraphonisch* <4 チャンネルステレオの>, *beachtlich* <注目すべき>, *bewohnbar* <居住可能な>, *(un)vermeidbar* <さけられない>, (……ない), *einbahnig* <一方通行の>, *hundertprozentig* <100%の>

副詞ではなかば接尾辞化した *-weise*, *-gemäß*, *-mäßig*<sup>(12)</sup> による形成が生産的である。これらは又 *-weise* 形成も含めて一部形容詞としても用いられている。

*wahrscheinlicherweise* <恐らくは>, *dankenswerterweise* <感謝すべきことに>, *programmgemäß* <プログラムに従って>, *termingemäß* <期日に従い>, *tarifmäßig* <料金表に従い>, *serienmäßig* <系列的に>, *wohnungsmäßig* <住居に関して>

動詞の形成では合成と解される各種の (いわゆる分離の) 前綴をもつ複合動詞, それに派生と見なしうる *be-*, *ent-*, *ver-* などの接辞による形成, 接尾辞では *-(is)ieren* が生産的である。各種の前綴では特に副詞が好まれ, *be-* は自動詞の他動詞化 (*beantworten* <答える>, これに類した *beliefern* <供給する>), 名詞からの他動詞形成 (*bedachen* <屋根をつける>) に好まれている。又 *ver-* は《完了, 誤り, 否定的》な意味の派生物詞を形成したり, 名詞や形容詞 (特に *-lich* 形成) を基礎成分とした動詞形成に用いられる。後者は *be-* に近い機能をもつといえよう。*ent-* はこれらに対する反対概

(12) FLEISCHER 250, 256 は *-gemäß* と *-mäßig* は形容詞として取扱っている。

念を形成することができる。

ab-〈平価切下げる〉, auf-〈平価切上げる〉, aus-〈(充分に)評価する〉, um-〈評価変更する〉, überwerten〈過大評価する〉; an-〈暖房を始める〉, auf-〈暖房し直す〉, be-〈暖房する〉, ein-〈暖房する〉, nach-〈追暖房する〉, über-〈暖房しすぎる〉, vorheizen〈あらかじめ暖房する〉; auf-〈(大量に)買上げる〉, einkaufen〈買入れる〉; bereifen〈タイヤをつける〉(自動車などに), beliefern〈供給する〉, bekochen〈料理する〉, entpersönlichen〈非人格化する, 人格を奪う〉, entpflichten〈義務を解除する〉, entmythologisieren〈非神話化する〉, entnazifizieren〈ナチスを解体する〉, vergasen〈気化する〉, verstädtern〈都市化する〉, vergrößern〈大都市化する〉, automatisieren〈自動化する〉, programmieren〈プログラム化する〉, rationalisieren〈合理化する〉, simulieren〈シミュレーションを行う〉

以上のタイプに加えて動詞の不定詞の名詞的用法(Können〈能力〉)と分詞形容詞を含めた形容詞の名詞的用法が頻繁といわれている。これは、接辞類を伴わない一種の派生と見なしうる型である。前者は多く抽象名詞として後者は人を指すために愛用されている。

Aufhören (Ende)〈終り〉, Fehlen (Mangel)〈欠如〉, Empfinden〈感情〉, Erleben〈体験〉, Bausparen〈住宅貯金〉, Einschreiben〈書留〉, Anliegen〈関心事〉, Unternehmen〈企業, 企て〉, Wohlbefinden〈健康〉; Jugendliche〈青少年〉, Arbeitslose〈失業者〉, Angestellte〈被雇用者〉, Angehörige〈所属員〉, Wahlberechtigte〈有権者〉, Schwerbeschädigte〈重度身体障害者〉

## 8 統辞的な造語

以上に概観した生産的な造語タイプの多数に見られる共通の特色は、その合理性ないし経済性であろう。できるだけ多量の情報をコンデンスして、簡単にしかも正確に表現しようという努力が感じられる。しばしばひとつの副文に相当するような内容が一語のなかに凝縮されている。少なくとも各種の語群表現が節約されている。例えば Hochschulreform (95ページ), Großhändler, Motorboot〈モーターボート〉, buttergelb (97ページ)などの語は Reform der Hochschule; großer Händler; ein Boot, das durch einen Motor〈エンジン〉 angetrieben wird〈動かされる〉; gelb wie Butter という語群より簡明で経済的といえることができる。

多数の新語は正確なあるいは響きの豊かな表現を経済的に行なうためにこのような手段を用いたのであるが、今日注目しなければならないのは、これらの手段が、語彙項目の単位としての新語形成以外に、むしろシンタックス的構文の簡易化ないし凝縮のための手段として愛用されているという点である。この状況について最も明確に指摘しているのは恐らく EGGERS (75ff.) であろうと思われるが、彼によるとこの古くから存在した手段が、19世紀に開始された準備期間を経由して、この最近の数十年間に広く普及したもののようである。今日控え目な個人はあるにせよ、これを全く用いない著述家はもはや存在しないという。確かに最近の新聞・雑誌やその他の印刷物からこの傾向を読みとることは極めて容



易であって、辞書に登録される見込みのない多数の形成が認められる。

これは要するに各種の語群表現の代りに一語でまとめて表現しようとする傾向で、その結果、副文や付加語形容詞、名詞二格、前置詞句などが不要となり文構造が合理的に簡素化される。それに本来可能である以上の情報量を文に負担させることができる。この長所はしかしまた名詞的文成分の拡大と内容の凝縮による過負荷をひき起し、その結果、動詞の表現の退化、重苦しさや内容の不明確さをもたらすことにもなる。この造語手段の利用は、いわゆる《名詞文体》*Nominalstil* のひとつの代表的な傾向を示すものであり、これにはこのような長短があるが、しばしば見られる批難はこの後者に向けられている。これに反し前者はむしろ迎え入れられるべき性質のもので、例えば POLENZ (152) は *daß eine Straße verlegt wird* 〈道路が敷設されること〉といった事柄が長い文の中で何度も表現される場合には *Straßenverlegung* 〈道路敷設〉というような語にならざるをえないと説き、この文体を擁護している。そして《名詞文体は必ずしも動的思考の退化を意味するものでなく動的概念について何かを表現する可能性を提供するものである。この種の思考上の抽象化がなければ現代の文明と精神文化は考えられないであろう》と主張する。

さて EGGERS (75ff.) はこのような語彙単位として定着する見込みのない臨時の造語手段利用を《即席造語》<sup>(13)</sup> *Augenblicksbildung* と称している。そして *Urlaubsgedanken* 〈Gedanken an den Urlaub 〈休暇についての考え〉〉, *Ausbruchsversuch* 〈Versuch eines Ausbruchs 〈脱出の試み〉〉, *Großkonzert* 〈大コンサート〉, *Frischfisch* 〈鮮魚〉, *Kleinschiff* 〈小船〉, (いわゆる接合合成のタイプである), *lärmerzeugend* 〈騒音を出す〉, *Lärmerzeugung* 〈騒音発生〉, *Lärmerzeuger* 〈騒音発生者(物)〉(共成のタイプである), *eindrucksstark* 〈強い印象の〉, *urlaubsmäßig* 〈休暇についての〉, *verwirklichbar* 〈実現される〉のような例をあげ、これらの語がいずれも語群表現をコンデンスしている点を説明し、さらにこれらが辞書に収録される見込みのないこと、又収録されても報いられないことを繰り返し強調している。もっとも語彙単位として定着する新語も元来同じ手段によって形成されていることも多く、このような即席造語が固定化されるケースもかなりあるわけである。しかしそのためのファクターは必ずしも明確ではなく、辞書に入るかどうかはしばしば偶然的なものによるであろう。しかし全体として見れば、この固定化のケースは例外だという状況が注目されよう。つまり今日、造語手段は語を造成するためというよりシンタックス手段として——多量の情報を凝縮する、あるいは文を簡素化する手段として——より好まれているわけで、これは現代ドイツ語の大きな特色とされる。

従って、この傾向はシンタックスの現象として取上げられる可能性をもっている。EGGERS (83) はこの点を強調し、造語を論ずる場合に *Rathaus* 〈(市)役所〉のような《固定した》*fest* 形成と *Urlaubsgedanken* のような《固定していない》*unfest* なタイプと

(13) 岩崎教授の訳による。《ハンス・エガース、岩崎英二郎訳 二十世紀のドイツ語》

を区別することをすすめる。後者のメルクマールは、その規定成分が文脈に応じて交換可能という点だとしている。又これらの臨時の造語は当該の文脈を離れると、しばしば充分には理解できなくなる傾向にあることが指摘されている。しかし実際にはどの形式がインスタントな語でありどの語が辞書に入っているのか見分けられないことも多い。特に外国人にとっては困難であろう。例えば *Verwendungsmöglichkeit* 〈使用の可能性〉, *Aufstiegsmöglichkeit* 〈昇進の可能性〉などは DUDEN に収録されているが *Ausflugsmöglichkeit* 〈ハイキングの可能性〉, *Beschäftigungsmöglichkeit* 〈就職の可能性〉, *Parkmöglichkeit* 〈駐車の可能性〉(多分〈駐車場〉の意味ぐらいに使っている)などは入っていない。この規定成分は文脈でいろいろ交換可能であろう。GLINZ (446) もこのタイプの造語を《統辞的造語》*syntaktische Wortbildung* として注目し、これが今日極端なぐらいに利用されていると述べている。そして主としてハイフンのある *Riemer-Angriffe* 〈リーマー氏の攻撃〉, *Kripo-Kritik* 〈刑事警察の批判〉などの例をあげ、これが前後のテキストがなくては充分に理解されないことに言及している。このハイフンによる結合はその臨時であることをかなりよく示してくれるが、それも絶対的なものではない。例えば *Mund-zu-Mund-Beatmung* 〈経口人工呼吸〉や *Trimm-dich-Pfad* (先述) は DUDEN に収録されているし、他方 *Fernsehinterview* が意識的に *Fernseh-Interview* と用いられったりという状況であるから。

現代ドイツ語の文構造の変化を論じている ADMONI (70ff.) も《臨時の》*okasionell* という表現を用いてこの現象にふれている。彼は同一文脈の中で *Restaurations-Terasse* と *Terasse der Restauration* 〈レストラン(この意味ではこの語はやや古い)のテラス〉が前後して用いられているケースをあげて、これは両者の同義性を、又これらの相互の交換の可能性を証明するものと考えている。そして特に合成名詞に関して、規定成分として固有名詞が増加したこと、又成分数の増加と全体的な頻度の上昇を現代ドイツ語の特色としている。さらに *-mäßig* 形成に関連してその経済性にふれ、又その理解のためにはしばしばコンテキストが必要なことに言及している。そしてこの習慣の拡大は意味とシンタックス上の重心を《基本的な文(型)》*Elementarsatz* にはめ込むという一般的傾向に基づくように思われると述べている。

ところでこれらの臨時の造語は別の面から見れば他のシンタックス上の統合体に変換することができる形式ということが出来る。そしてこのファクターが実は造語の生産性に大きな意味をもつわけで、このようなタイプの造語が本来の語彙単位形成を越えた程度にまで豊かに使用される可能性は充分その造語プロセス機構の内部にあったのである。ただその必要性が——つまりこの手段を頻繁に用いる——かってない程に高まってきたところに現代ドイツ語の特色とすべき状況が見られるわけである。

このような状況であるから、ドイツ語文法の一部にはこの生産的なタイプについての規

則が含まれなくてはなるまい。この規則を心得ていれば、誰でも必要に応じて即席に一語を造り出すことができるのである。たとえ受動的にであっても今日これを心得ておくことは必要であろう。そうでないと現代ドイツ語を充分に理解できないことになりかねないと思われる。

シュビーゲル誌（注(9)参照）から数例引用しよう。

Fernsehggeschichte〈テレビの歴史〉, Medien-Erpressung〈メディアによる恐喝〉, ARD-Koordinator〈ドイツ放送協会担当者〉, Fernsehabend〈テレビの夕〉, Februar-Abstimmung〈二月票決〉, 24-Wochen-Frist〈24週の期限〉, Abtreibungsversuch〈追放の試み〉, Spezialklinik〈特別の病院〉

## 9 意味に見られる傾向

新語と廃語は当然、語彙の意味体系をも変えることになる。しかし、一部の語は外形を保持したまま意味内容のみ変更される。このような意味体系の変遷を全体的・組織的に記述することは、従って語形面からの記述よりはるかに困難である。ここでは、いくつかの目立つ傾向について簡単に触れることにする。

既に多数の新しい具体的名詞が認められたが、他方で《抽象化》*Abstraktion* の傾向が強いこともしばしば指摘されている。これは特に学術的専門語で強いが、*-ung*, *-heit/-keit*, *-ität*, *-ismus* などの接辞形成が豊富なことや *-nahme* タイプなど (*-ung* も関係するが) 共成形成が、いわゆる即席造語の場合も含めて極めて生産的である点によく現われているであろう。MOSER II (477) は抽象化はすべての文化語に見られる特色としているが、確かに高度の思考には抽象概念ないし抽象化は不可欠である。先述の POLENZ の主張が思い起されよう (99ページ参照)。MÖLLER (45ff.) は学術研究の言語表現では、いかにこれらの抽象化が必要であるかを説いている。しかしこの抽象化の傾向がさらに一般語にも及ぶことになる。これは専門語一般の影響の流れに関連している。彼によると、この影響はいつごろから及んだかははっきりしないが、多分、実業学校の発達や一般向の専門書や学術書が仲介したであろうと推定している。

ともかく、その結果、例えばあるコーヒー挽の使用説明書に *gemahlener Kaffee*〈挽かれたコーヒー〉の代りに *Mahlgut*〈粉碎物〉が登場したり、冬期に道路にまかれる砂が *Streugut*〈散布剤〉と称されたりすることになった。さらに *Backprozeß*〈パン焼プロセス〉, とか *Wohnverhältnisse*〈住居関係〉にはじまる 20 例ばかりのこの傾向の語を列挙している。恐らく後者なら多くは *Wohnung* で足りるであろう。この傾向の例は MOSER II (500) にも挙げられている。又 RÖMER (94) は特に商業広告について、この傾向を《非具象化》*Entkonkretisierung* と称して価値的意味の上昇をねらうものとして注目している。確かにこのような一般の抽象化の傾向は高級なイメージの語の愛用という一般の語選択に見

られる傾向のひとつの現われと解される。

つぎに特に合成形成で見られる意味の《細分化》*Differenzierung* の傾向がある。MOSER II (505) によればこの傾向は既に中世以来見られるというが、現代この傾向は特に強いと想像される。先述の多数の例からこれは読みとれるが、例えば Flugzeug〈飛行機〉は Propeller—〈プロペラ〉, Düsen—〈ジェット〉, Raketen—〈ロケット〉などによって規定されて細分化ないしその概念の鋭敏化が達せられる。既にあげた ein—, aufkaufen; ab—, auf—, aus—, über—, unterwerten などは動詞の例である。形容詞では特に色彩語が多数の細分化を示している。flaschen—, gelb—, gras—, moos—, oliv—, persisch—, pflanzen—, waldgrün (grün〈みどり〉) を合成形成で細分化している例<sup>(14)</sup>。

このほか schön/unschön/häßlich のような un—形成や Prüfung/Prüfen, Erlebnis/Erleben のような不定詞の形成でも意味の細分化が生じてくる。又外来語も意味の細分化に役立っていることが多い。例えば色彩語の beige〈ベージュ〉, pink〈ピンク〉などが典型的であろう。

合成形成から発展して基礎成分が単独で新しい意味を担うこともある。例えば Bahn は今日 Eisenbahn〈鉄道〉を意味することになった。元来は〈路〉を意味する語であった。これは一種の短縮の結果でもあり、又語形を変えない新しい意味の追加という意味変化でもある。類似例には Zug (Eisenbahnzug)〈列車〉, Rad (Fahrrad)〈自転車〉, Band (Tondband)〈(サウンド)テープ〉, Platte (Schallplatte)〈レコード〉(元来〈音響板〉の意が〈板〉のみで用いられることになった)などがある。これらは更に新しい合成形成に加わり細分化に利用される。Plattenspieler〈レコード・プレイヤー〉, Sprechplatte〈朗読レコード〉など。

さらに、どの時代にも認められるが、現代特に急速と思われる傾向に意味内容の拡大ないし《希薄化》*Sinnentleerung* がある。語は広く用いられるほど一般に内容が希薄になる。現代のようなマス・メディアの発達はもち論このプロセスを促進するであろう。MOSER II (503) は Politik〈政策〉, Technik〈テクニク〉, Raum〈スペース〉, Sektor〈地区, 領域〉, Ebene〈水準, レベル〉, durchführen〈実施する〉, vollziehen〈執行する〉, vornehmen〈実施する〉(これらの動詞はいずれももっと軽い意味で用いられている)や哲学用語の Begriff〈概念〉, Frage〈問題〉, Problem, Erlebnis〈体験〉, Existenz〈実存〉それに Hochschule〈大学〉, Akademie〈アカデミー〉などの例をあげている。一般的には、いわゆる流行語がこの傾向に陥り易いことはいうまでもない。先にも見たように今日、専門用語などの高級なイメージの語が好まれるという語彙選択の傾向から、必然的にこれらの語の意味内容の希薄化は起ってくるであろう。類似の傾向は我国でも広く認められる所である。《大学》, 《研究》, 《ゼミナール》(あるいは《セミナー》)といった語の運命や、住宅

(14) 注(11)の色彩語の文献を参照されたい。

に与えられるさまざまな高級語が思い起されよう。

この《意味の希薄化》を補う手段は《強調》ということになるが、特にこの手段の多用傾向は商業広告で顕著である。しかし強力な表現の意欲は今日一般語でも大きく、例えば《ビールを飲みながらの語らいでは, selbstverständlich (ja <はい> の代りに) と ausgeschlossen (nein <いいえ> の代りに) しか聞かれない》といった WUSTMANN (299) の所見となって現われる。この前者は<自明の>, 後者は<締め出された>あるいは<不可能な>というのが原意である。sehr <大へん> はもともと中世のドイツ語は<痛ましい> という強い意味をもっていたが、今日では弱過ぎると感じられ fabelhaft<寓話的>, phantastisch<幻想的>, sechrecklich<驚くべき>, furchtbar<恐しい>といった語が口語レベルを越えて用いられている。又最高級や絶対最高級, 及びこれに相当する語は非常に好まれている。hochbedeutsam <非常に重要な>, höchstwillkommen <大いに歓迎された>, その他 hoch-, super-, über- の形成は多い。又 Mammutkonzern <マンモス・コンツェルン>, Riesenkonzern<巨大コンツェルン>のような強調の規定成分を伴う合成もこの意味傾向の現われである。以上の例は MOSER II (504) の引用であるが、同種の例は極めて容易に見出すことができる。なお俗語的な語彙の選択もこの表現意欲に発するものもあるであろう。

この強調と同趣のものに《称揚的》な一種の表現のイメージ上昇の語選択ないし語形成がある<sup>(15)</sup>。これは先述の強調表現に加えて、良いイメージの、つまり高級で上品な専門語や外来語を好む傾向となって現われている。この傾向のためのファクターはいろいろあるが、この傾向から例えば Kammer/Zimmer/(Wohn)raum <部屋>とか Magd/Dienstmädchen/Hausangestellte, -gehilfin <女中, 女中さん, 家事従業員, (お)手伝(さん)>といった語の交替も起ったのであった。dick <太った>の代りに vollschlank <体格のいい> (文字通りには<豊かにスマートな>の意)と称したり、小さい商店なのに Modehaus <モード・デパート>, Imbißhalle <軽食ホール>など呼ぶのもこの傾向に発している。

この Haus, Halle の使用は、いわば意識的な意味変更であるが、これは古語の復活にも認められる。この体系的なケースは、かつてのナチスの語彙に見られる。

以上を要すれば、抽象化、細分化、希薄化、強調ないし称揚的傾向の大体四つが意味面に見られる傾向ということになろう。

(15) この広告語での傾向については RÖMER 81ff. が《意味的切上げ評価》*semantische Aufwertung* のもとに詳細に取扱っている。特にツーリズム広告については拙論《現代ドイツのツーリズム広告の語彙の特色について》(金沢大学教養部論集・人文科学篇 11 所収)を参照されたい。

## 参 考 文 献

- ADMONI, Wladimir : Die Entwicklungstendenzen des deutschen Satzbaus von heute. München 1973
- BACH, Adolf : Geschichte der deutschen Sprache. Heidelberg 1965<sup>8</sup>
- BERNING, Cornelia : Vom "Abstammungsnachweis" zum "Zuchtwart". Berlin 1964
- CARSTENSEN, Broder : Englische Einflüsse auf deutsche Sprache nach 1945. Heidelberg 1965 (I)
- ..... : Englisch im Deutschen. Zum Einfluß der englischen Sprache auf das heutige Deutsch. In : paderborner studien Jg. 1973/74 Hf. 3 (II)
- Der Große DUDEN. Bd. 1. 1958<sup>14</sup>, 1961<sup>15</sup>, 1968<sup>16</sup>, 1973<sup>17</sup>
- EGGERS, Hans : Deutsche Sprache im 20. Jahrhundert. München 1973
- FLEISCHER, Wolfgang : Wortbildung der deutschen Gegenwartssprache. Leipzig 1969
- FRIEDERICH, Wolf : Moderne deutsche Idiomatik. München 1966
- GLINZ, Hans : Deutsche Standardsprache der Gegenwart. In : Lexikon der Germanistischen Linguistik. Tübingen 1973
- HELLER, Klaus : Das Fremdwort in der deutschen Sprache der Gegenwart. Leipzig 1966
- KÜPPER, Heinz : Handliches Wörterbuch der deutschen Alltagssprache. Hamburg 1968
- MACKENSEN, Lutz : Die deutsche Sprache in unserer Zeit. Heidelberg 1971<sup>2</sup> (I)
- ..... : Deutsches Wörterbuch. Baden-Baden 1962<sup>4</sup>; München 1967<sup>5</sup> (II)
- MAURER-STROH : Deutsche Wortgeschichte. 3 Bde. Berlin 1959f.<sup>2</sup>
- MITTELBERG, Ekkehart : Wortschatz und Syntax der Bild-Zeitung. Marburg 1967
- MÖLLER, Georg : Deutsch von heute. Leipzig 1965<sup>3</sup>
- MOSER, Hugo : Deutsche Sprachgeschichte. Tübingen 1965<sup>5</sup> (I)
- ..... : Neuere und neueste Zeit. Von 80er Jahren des 19. Jahrhunderts zur Gegenwart. In : MAURER-STROH, Bd. 2, S.561ff. (II)
- ..... : Sprachliche Folgen der politischen Teilung Deutschlands. Düsseldorf 1962 (III)
- NAUMANN, Bernd : Wortbildung in der deutschen Gegenwartssprache. Tübingen 1972
- POLENZ, Peter von : Geschichte der deutschen Sprache. Berlin 1972
- RÖMER, Ruth : Die Sprache der Anzeigenwerbung. Düsseldorf 1968
- SCHIRMER/MITZKA : Deutsche Wortkunde. Berlin 1965<sup>5</sup>
- SCHWARZ, Ernst : Kurze deutsche Wortgeschichte. Darmstadt 1967
- STAVE, Joachim : Wörter und Leute. Mannheim-Zürich 1968
- WAHRIG, Gerhard : Das große deutsche Wörterbuch. Gütersloh 1967
- WATERMAN, John T. : A History of the German Language. Seattle and London 1966
- WASSERZIEHER : Woher? Hannover-Hamburg-München 1966<sup>17</sup>
- WUSTMANN : Sprachdummheiten. Berlin 1966<sup>14</sup>